

3月23日

桜前線北上中、卒業へ



■卒業式が終わって

謝恩会が開かれるホテルに向かうには、まだかなり時間がある。もう一度、4年間通ったキャンパスを歩いておきたくなった。手招きする友人たちに「後で合流するよー」と声を返して、式場の講堂を後にした。

卒業式が終わったキャンパスは、真新しいスーツ姿で照れ臭そうに談笑する男子学生や、弾む心を隠しきれない袴姿の女子学生たちで賑わっていた。煉瓦壁の講堂、古びた時計台、創立者の銅像……。今日でいよいよ学生の身分ともおさらばかと思うと、いつもの風景がなんだか甘酸っぱい。ただのベンチや掲示板、学食のメニューまでもどこか特別なものに見えて、未練がましくじつと眺めてみたりする。案外センチだな、と自分に苦笑した。

校門に覆い被さるように伸びた桜の枝が、蓄をふくらませかけている。



あと数日この陽気が続けば、一斉にほころび始めることだろう。

謝恩会の後、二次会にも繰り出して、練馬のアパートに戻ったときは深夜の1時を回っていた。エントランスの郵便受けを開けると、一通の封書が届いている。父からだ。鍵を開けて部屋に入り、テーブルの上にはボンと置いた。まずは酔いの火照りを少し冷ますのが先決。封を切るのはその後だ。コンビニエンスストアで買ったミネラルウォーターをゴクゴクと飲み干し、コーヒーマーカーにやや多めの豆をセットする。

この正月に帰郷した折、オヤジの機嫌をちょっと損ねてしまった。元日の朝を家族で祝うのもそこそこに、高校時代の友人たちとスノーボード旅行に出発し、帰宅した後も飲み会やらカラオケやらと誘われるま